

同朋
選書
32

人と生まれて

宮城 顛

はじめに

金沢教区仏教青年連盟の方々が、毎年七月、八月の二ヵ月間、九と十のつく日に「聞」の会をはじめられてから、すでに昨年で四十周年を迎えたこととあります。「聞」の会は、一九六三（昭和三十八）年金沢別院が焼した後、その再建を願って、まず一人一人の信心を吟味し、歩み出すことを誓ってはじめてられた聞法会であると感じています。その頃の焼失した本堂横の、納骨堂の建物の広間をビッシリと埋めた人々の熱気を今に覚えております。そしてその熱気は、再建なった本堂を会場にはじめられてからも変わることなく、今に続いております。

その「聞」の場で話させていただいたものなかから、五話を選びだし、一冊にまとめてくださるということになりました。ためらいはいろいろあるのですが、今は素直に、ありがたくお受けすることにしました。ご苦労くださいました皆さまに、御礼申し上げます。

はじめに

第一章 とももの同朋にもねんごろに

ねんごろのころ／ねんごろなつもり／惑に染まった凡夫／事実から遠ざかっていく悲しさ／レットテルが奪うもの／ねんごろなころを失うとき／無量寿に帰る

1

第二章 阿弥陀の御いのち

わがいのち／現代の間／「わが」という思い／私の思いを超えたいのち
無量寿／樹／倒木更新／お念仏とは、自我のはじける音

33

第三章 遇うて空しく過ぐる者

人の世にいのちのぬくもりあれ／人を人とは思わない社会／人間のエゴ／事実を受け止める／「遇う」／「観」／「本願力」／自身を深く信じる

67

第四章 和讃する心

言葉の響き／声は意を伝える／書は声を伝える／言葉で向かい合う／言葉が私を捉えていた／「感動を失ったら、後は死ぬだけだ」／「孤独が怖い」／言葉のキャッチボール／本願の道を歩む感動とともに

101

第五章 清浄の心

誇る心、裁く心／宗教心を問う／『浄土論註』から／分別心と不二の心／人間が人間にとって問いになる／鷺田清一さんと田口ランディさんの言葉から／恩(ON)／自分のあり方に頭が下がる心

135

第一章

とももの同朋にもねんごろに

ねんごろの「ころ」

『御消息集』としておさめられている親鸞聖人のお手紙ですが、としごろ念仏して往生をねがうしるしには、もとあしかりしわがころをもおもいかえして、ともの同朋にもねんごろのころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもそつらわめとこそ、おほえそつらえ。よくよく御ころえそつらうべし。

(真宗聖典五六三頁)

というお手紙があります。

そこに約めて申しますと、「としごろ念仏して」、長年念仏者として生活してこられているそのしるし、証といってもいいのでしょうか、そのしるしには「わがころをもおもいかえして、ともの同朋にもねんごろのころのおわしましあわばこそ」とおっしゃっているのです。一口でいえば親鸞聖人は念仏者として生きていることとしる

しというものを「ねんごろのころ」を持つということにご覧になっているのです。ご門弟の方々に書き送っておられるお言葉ですが、今日のいろいろな問題の根底に、この「ねんごろ」ということが深く関わるのではないかと思うのです。

「ねんごろなころ」という「ねんごろ」という言葉は皆様もよくおわかりと思います。「あの人はねんごろな人だ」というような言い方をいたします。ちょっと調べてみますと、この「ねんごろ」という言葉は、「ねもころ」という言葉から転じた言葉なのだそうです。そしてそれは「根」という字と、「も」という字と、「凝(ころ)」「という字で「ねもころ」と、あるいは「根」と「如(もころ)」「という字を書いて「ねもころ」と読まうのだそうです。そして「ころ」というのは「絡む」という「絡」という言葉に通じるのです。

『古語大辞典』(小学館)で引いてみますと、「根も絡みつくほどに」とあり、相手の人とそれこそ命を一つにすると、木がお互いに根を絡みつけ合っていると、その根を引き離すことができない、別々にならない。そういう一つになって生きるという意味

が「ねもごろ」という言葉の意味のようです。これはもう一つはつきりしないようで、『古語大辞典』でも「根も絡みつくほどにの意味ではないか」と書いてありまして、言い切っては「ないか」という言葉で結ばれていました。

しかし、そのことの真偽は私にはわからないわけですから、この「根も絡みつくほどに」という言葉はなんとなくなすけるのです。「ねんごろなころ」というのは、何か相手の人と根を一つにするという心を確かに表わしているのではないかと思うのです。

『広辞苑』(岩波書店)をみますと、これは言葉の成り立ちは書いてありませんで、「心づかいのこまやかなさま」「まごころでするさま」、「さま」というのは様子です。それから「互いに親しみあうさま」と、何かそういうような言葉が意味としてずつとあげられていました。要するに「ねんごろ」という言葉は、相手の気持ち、さらにいえば相手の存在を思いやる心なのでしょう。その相手の存在そのものを常に心にかけ、思いやるという意味が「ねんごろ」という言葉にこめられてあるように思います。

ねんごろなつもり

しかし相手を思いやると申しましたが、自分の思いで相手を思いやるのではないのです。自分の思いで相手を思いやるというときには、自分は「ねんごろ」なつもりでありません、相手の人にとっては煩わしいだけということも往々にしてございましょう。だから「ねんごろ」ということは、ただ単に相手を思いやるということではなくて、相手を思いやる心を持って相手に聞くということ、相手の心に尋ねるといったことが「ねんごろ」という心にはあるのではないかと思えます。

自分なりに何か相手のことを考えて「こうすると一番喜ぶのだろう」と何かそういうかたちで押し付けるのではなくて、精一杯のことをしながらしかもそこになお相手の気持ちを思い計るということが押さえられてくるのかと思えます。

そしてこれを親鸞聖人は、「もとあしかりわがころをもおもいかえして、ともの同朋にもねんごろのころ」とおっしゃっています。そこにある「もとあしかりしこ

ころ」ということを漢字で書きますと、「悪しかりし心」ということです。「ねんごろ」でない心というのは「悪しかりし心」であり、「悪しかりし心」ということは、ただいけないという事柄ではなくて、人間としてのあるべき心を失う、人間としての心を失っているということをおっしゃっているのです。

この「悪」という字は、「善(よい)」「という言葉に対しての「悪」ということももちろんありますが、仏教におきましてはより広く「嫌悪」というときの「悪」の意味で使われます。人間として「嫌悪」すべきあり方です。何か褒められるとか、罰せられるとか、そういうことでなくて、たとえそれがどういふ罪にもならないとしても、人間としてのあり方を失わせ、損なうというようなことを「あしかりし」とおっしゃるのだと思うのです。そしてこの「あしかりしころ」という言葉に続いて次のお手紙に、

ひとえにわがおもつさまなることをのみ、もうしあわれてさうろうひとびと

(真宗聖典五六四頁)

と書かれてあります。

そういう「あしかりしころ」というのは、「ひとえにわがおもつさまなることをのみ、もうしあつているひとびと」と、自分の思いのままにものを言い、自分の思いのままに行動する、そういう自分の思いのままにという意味で「ひとえにわがおもつさまなることをのみ」という言葉とそのままだ「あしかりし」という言葉とが重なるわけですが、つまりそれは「正信偈」のお言葉の上に移して申しますと、「邪見憍慢悪衆生」(真宗聖典二〇五頁)ということですが、これは先ほど申しましたように人間としての本来を見失っているもの、人間としてあるべき心、あるべき姿を見失っているもの、そういう「悪衆生」というのが「邪見憍慢」であるということなのです。

邪見憍慢というのは「わがおもつさまなることをのみ、もうしあわれてさうろうひとびと」のことなのです。「邪見」というのはいわゆるエゴイズムです。自己中心であり、自己固執です。

コンプレックスという言葉があります。いつも人と比べて優越感ゆうえつかんや劣等感れつとうかんにとらわれているもの、自己中心でいつも人と比べて人より上だと優越感にふけり、人より下であると劣等感に悩まされる。優越感も劣等感も同じ心です。人と比べて自分の方が上であろうとする心です。自分の方が下だと認めた心ではないのです。下だと認めたくない心で下になっているものですから劣等感に悩まされるのです。本当に素直に自分が下だとうなずけたら劣等感ということはないのでしょう。ですから劣等感も優越感も正反対のようですね、心のあり方は同じ優慢心なのです。

邪見優慢なるもの。人がひとたび邪見優慢に立つとき、人間の営いとなみが人間の本来を失わせていく。人間の本来を失わせるということさらには広げていけば、人間が他のいろいろな命とともに生きている世界を危あやうくしていくということなのでしょう。そして、人間がひとたび邪見優慢に立つとき人間は必ず悪衆生になるということが、この言葉には押さえられているかと思うのです。その「邪見優慢なる心」を「あしかりしころ」と、そしてその「あしかりしころ」を思い返して「とももの同朋にもねんごろの」とおっしゃっているわけでしょう。

邪見も優慢もそれは他に対していつも自分を閉ざした心です。「俺、俺」という邪見です。エゴイズムというものが他人を受け入れない、そういう閉ざした心であるということはもちろんですし、優越感や劣等感に動かされていく心もまた、人に対して自分というものをどこまでも握にぎり締しめている心です。それは心を閉ざした姿ですし、そこでは人間関係、人間としての出会いというものには決して開かれてこないということが出てくるかと思えます。

惑に染まった凡夫

私たちは、振り返りますと、結局今日まで私自身ということもそうでありますし、広くいえば人類全体が実は邪見優慢で突っ走ってきたと言っているのでしょう。いつも自己中心であり、我が家中心であり、我が国中心であり、最大広げても人類中心ということなのです。そしてこの人類中心、自己中心に生きていくことにおいて、いつも周

りの人たちを傷つけ、ときにはその存在を抹殺^{まっさつ}して私たちの「文化」といつているものは発達してきていると言つてよいかと思ひます。

文化、発達ということを申しますけれども、文化が発達するということは、約^{つひ}めて言えば人間にとつて生きやすい状況になるということです。人間にとつてより豊かであり便利になつていくことが、文化が発達することであると、考えてしまつてゐるのです。そのため人間が人間にとつて都合のよい世界に変えてきたことによつて、この世界を他の命にとつて生きにくい世界にしてしまつたのです。初めはそれはそのまま人間にとつては都合のいい世界であつたのですけれども、しかし他の命にとつて住みにくい世界というものは実は人間自身にとつてもその生活が危うくなる、生きにくい世界になることであるということ、このごろになつて思ひ知らされているということがあります。

それでこのごろは、「自然とともに生き、地球に優しい生活を」というようなことが盛んに言われるわけです。気がついたときから少しも私どもが他のあらゆる命とともに生き、自分たちがそこに生かされてもらつてゐる地球というものを決して傷つけないような生活を築いていくということは、本当に大事なことであるわけです。だからそういう生活を私たちが願ひ求めていくとときに、やはり一番根本にどういふことが問われてくるのか。それをいよいよ私たちは厳しく問われているように思ひます。

この「ねんごろ」といふこの言葉は、根が絡み合うほどにともに生きていく関わりであります。そのねんごろな心を失ひ、「あしかりしころ」をもつて、「ひとえにわがおもうさま」なことはかりを言い合つてゐる。事実に出会い、事実^{じじつ}に学び、そしてうなずき合つて生きるということがないままに、私たちは先に自分が持つてしまつてゐる物差^{ものさ}しでものごとを受け止め、ものごとを考へるといふことを繰り返してきてゐるように思ひます。

先入観^{せんいゅうかん}とか固定観念^{こていかんねん}とかいふような言葉がありますが、私たちにおいては先入観とか固定観念^{こていかんねん}というものが抜き難くあるのです。親鸞^{おんらん}聖人は「惑染^{わくせん}の凡夫^{ぼんぷ}」「正信^{せいしん}偏^{へん}」

真宗聖典二〇六頁)とおっしゃいますが、惑い、迷いと言ってもいいのですが、迷いに染まっているのです。ときどき迷うのではないのです。私どものものの考え方、受け止め方、そういうものがもう惑いに染まっているということなのです。この染まっているという言葉で言われるところには深い悲しみがあるのでしよう。人間の今までの行為を反省して、それを何とか直していこうとするそのときにもやはり惑いははたらいいて、惑いに染まっている。自分の思いで惑いを起こしているのではないのです。惑いの方が私を色づけしていて、それは私がもう気がつく、意識するよりももっと深く、私のももの見方、受け止め方、考え方というものを染めてしまっているのです。それを「感染の凡夫」と、「惑に染まった凡夫」とおっしゃるのです。

私たちは自分で事実を見ているつもりになっているのですけれども、よくよく考えてみますと、いつそういう考え方を身につけたのかわからないような、先入観、固定観念というものでものを見てしまい、わかつた気になってしまつて、評価してしまつていているということがあります。

皆様もよくご存知かと思いますが、新聞(一九九四年三月三日)で読ませてもらったのですけれども、徳島大学が大学に留学してこられる外国の人のために寄宿舎を造るといふ計画を発表したら、地元の人たちが反対されたわけです。そしてどうしてもその寄宿舎を作るのなら、自分たちの住まいとの間に二メートル以上の塀を建てると。そして塀で区切つてもまだ信用ならない、夜にその塀を乗り越えて何しに来るかわからないから夜は塀の上を乗り越えてきたらすぐにわかるように塀の上をライトで照らせというように八ヶ条の条件を大学側に申し入れたという記事が出ていました。そしてその地元の自治会の会長さんの言葉として出ているのですが、「日本人なら信用できるが、外国人は信用できない。住民とのトラブルが予想され、出来てほしくない施設だ。施設ができれば、孫子の代まで外国人と暮らさなければならぬのだから、これぐらいの要求は当然だ」と、そういうことをおっしゃっているという記事が出ていました。「外国人は信用できない」という、その地元の人たちは外国人と呼ばれる人たちといろいろと出会い、そして交わつて生活をしてみて、「これはとても信

用できない」と判断されたのかというと、そうではないのです。だいたい外国人と会われたことがないのです。会っていないからある意味でよけいに拒否反応が出るのでしょう。それで「外国人は信用できない」というレッテルを貼ってしまうのです。

これはもう徳島大学の地元の人たちだけではありません。そういう考え方がそれから私たちにはみんな「感染」です。大学の同僚から聞いたのですが、大学にアメリカから先生が講義にみえていまして、その同僚がアメリカからきている人と何かいろいろと話をしていたのだそうですが、たまたま「アメリカ人は…」という言い方をしたのだそうです。そうしたらそのアメリカ人の人は、すかさず「アメリカ人なんていう人間はいません」ということをぼんと言われたというのです。アメリカに国籍を持っているスミスとか、ジョンだとか、メリーとか、一人の人格を持った人間がいるのであって、アメリカ人とそうやってくくつてしまえるような人間はどこもいない。一人一人の命の重さ、一人一人の思いというのを考えずに、「アメリカ人は…」と十把一絡げにくくつてしまう。それは「外国人は…」という考え方と全く同じなのでしょう。

ただそういう「外国人は…」とか、あるいは「アメリカ人は…」というところだけではなく、私たちの生活の中でも「近頃の若い者は…」という言い方がありますし、「古いものは…」ということがありますし、やはりいろいろな面で十把一絡げにして、具体的なその人を見ずに外側からレッテルを貼って決めてしまう。直接的にはなく人間を分けていく考え方がありますし、差別を生み出す考え方があります。

親鸞聖人が「ねんごろに」とおっしゃるときには、今出会っているその人をそれこそ固定観念や先入観で決めてしまわずに、一人一人と真向かいになる、その一人一人を深く見つめ、一人一人の心を静かに聞きなさいということが言われてあるように思います。

私どもは、ともすればそういうことを全く離れて、何か全部決めつけて、レッテルを貼って、それでわかつたつもりになってしまう。そしてそれが今日のこのような分裂、対立、争いというもの元にあるのではないのでしょうか。我々は民族の対立や分裂ということをどのよう克服していけばいいのか、どのように越えて同じ人間として